

ふたりのイーダ

松谷みよ子

絵 司 修



ふたりのイーダ

松谷みよ子 司 修 絵



913

まつたに みよ子
松谷 みよ子

ふたりのイーダ

講談社 1976

210 p. 22cm (児童文学創作シリーズ)

ふたりのイーダ

昭和51年 7月20日 第1刷発行

昭和51年 第2刷(H)

著者 松谷みよ子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京(03) 945-1111 (大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

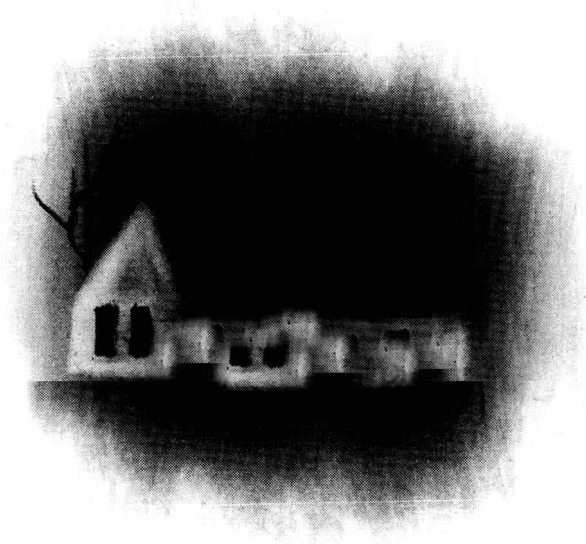
製本所 藤沢製本株式会社

©松谷みよ子 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価は箱に表示してあります。 (児一)

ふたりのイーダ



■画家紹介

つかさ
司
あさむ
修

群馬県前橋市に生まれる。主体美術協会会員。昭和35年ごろから油絵の個展を十数回ひらく。現在、さし絵・絵本・装丁にはば広く活躍中。最新作に「魔女の森」。さし絵では、「死の国からのバトン」(松谷みよ子作)など。

本業の絵は、シュールレアリスムというより前衛に近く、生命の原点を神秘的にとらえた作品が多い。

■著者紹介

まつたに
松谷みよ子

東京に生まれる。1951年、「貝になった子供」で第1回児童文学者協会新人賞を受け、以来、「龍の子太郎」(1960年、第1回講談社児童文学新人賞、国際アンデルセン賞優良賞)、「ちいさいモモちゃん」(1964年、第2回野間児童文芸賞)、「モモちゃんとアカネちゃん」(1975年、赤い鳥文学賞)と、一級の名作を生んでいる。

も

く

じ

10	赤んぼうは、しっている……………	90
9	それは、むかしの話なのだ……………	80
8	おそうじ、おそうじ……………	67
7	ふたりのイーダ……………	58
6	りつ子……………	50
5	ゆう子といす……………	41
4	見えなくなったゆう子……………	33
3	おほりばたに出るものは……………	24
2	歩くいすと、ふしぎな家……………	15
1	列車は花浦についた……………	6



11	このいすはだれが――	101
12	おかしなカレンダー	112
13	協力者	122
14	数字の意味はわかった	131
15	りつ子、ふしぎな家へいく	141
16	とうろう流し	154
17	生まれかわり	167
18	ほんとうのことをはなしたとき	178
19	これですべてが――	187
20	りつ子からの手紙	197
	あとがき	208



1 列車は花浦についた



チャイムが鳴って、車内アナウンスがひびいたとき、直樹はやれやれとほっとした。

——あと五分後に、花浦に到着いたします。お出口は進行方向左側、停車時間は二分です。——

なにしろ新幹線にのって、東京から新大阪まで三時間十分、新大阪でのりかえて、花浦まで五時間、合計、八時間十分の旅だ。持ってきたまんが雑誌は、すみからすみまで読んでしまったし、アイスクリームは二度もなめた。直樹は早くおりたくて、うずうずしていた。ゆう子ならいい、おかあさんと直樹がすわっている間によっかかりながら、いいごきげんでさんざん歌をうたった。二さい十一か月のちびだから、まわりはまだゆるしてくれる。でも直樹はもう四年生だった。いくら汽車の旅でたいくつしても、座席でボール投げをするわけにはいかない。

「直樹ちゃん、荷物をおろしてね。ひとりでおろせる？　だいじょうぶ？　ゆうちゃん、ゆうちゃん、おきるのよ、もうついたのよ。」

おかあさんはいそがしい。直樹とゆう子の両方に、いつぺんにはなしかける。ゆう子はぐっすりねていた。あんまりうれしくて、はしゃいだものだから、くたびれたのだ。すんとねてしまった。直樹は座席の上に立つて、白とグレーのかばんを一つずつおろしながら、座席の背にもたれているゆう子を見おろした。こうしてみると、まだほんとうに小さい。足をなげ出してえんこしてねているところは、おもちゃのくまみたいだ。生まれてからまだいつぺんもきつたことのない長いかみの毛が、色白のゆう子の顔を、やさしくふちどつていた。

「ゆうちゃん、ゆう子、おきるのよ。」

ゆう子は長いまつげをふせて、まだねむっている。おかあさんはたまりかねたのか、

「イーダちゃん。」

と、ちよつときつくいった。そうしたらどうだろう、ゆう子のやつ、ぱつと目をさました。そして、しばらくふしぎそうにあたりを見まわしていたが、座席に立った直樹が、にやにやして見おろしているのに気がつくと、

「イーダ。」

と、にくたらしい顔をしてみせた。直樹はおかしくてわらってしまった。イーダ、というのは直樹が教えたのだけど、ゆう子はすっかり気に入ったらしく、なにかいうと、イーダ、という。そして、イーダちゃん、という、ああい、なんてへんじをするのである。

「やれやれ、おきるととたんにイーダ、ですか。こまった人ね。さあ、おんりよ。おくつをはいてね。おじいさんと、おばあさんがまっていますよ。」

直樹はうでに力をこめて、二つのスーツケースをおろした。グレーは、直樹とゆう子とふたりぶんの荷物だ。白のは、おかあさんの荷物だ。本がはいっているから、ずしりと重い。

「おかあさん、うんと長く九州にいつているの？」

直樹はわざと、なんでもなさそうな声できいた。

「なるべく早く帰ってくるわ。でもね、お仕事だから……、わかっているでしょう？」

「うん、わかってるよ。」

直樹は、むねのへんが重くするしい気がした。おかあさんの仕事は、直樹が生まれない前からあつて、直樹は、おかあさんというものはみんな仕事をしているものだ、と、ずっと思っていた。あれは直樹が五つぐらいのときだったろうか、おかあさんは直樹をつれて、長野へ取材に行くことになった。りんごのなる村にいるおばさんのところへ直樹をあずけるつもりだった。



ところがその朝、おかあさんが直樹の手をにぎったら熱かった。これは熱がある、と思つてはかつたら、すこしあつた。すぐに薬を飲ませ、さておかあさんは考えたそうである。つれていくべきか、おいていくべきか……。しかし一汽車おくらせて、おかあさんは直樹をつれて出た。汽車の中で頭をひやしながら長野へつくと、すぐ医者とびこんだ。そしてつぎの日から直樹をおばさんの手にあずけて、仕事に出てしまった。直樹はおとなしくねていたそうである。そして、おかあさんの顔が、ちつと見たいよ、などといつて、おばさんをふびんがらせたそうである。

なにしろそういうおかあさんだから、直樹は、るす番だの、ほつておかれるのにはなれていた。こんどおかあさんが直樹とゆう子をつれて、はるばる花浦まできたのも、仕事のためなんだ。九州へ仕事でいくときまつたとき、おかあさんはすぐこういった。

「ねえ、こうしましうよ。直樹とゆう子は花浦のおじさんのおうちにまつているの。おかあさんはそのあいだ九州へちよつといつてくるからね。花浦までいけば九州はすぐだしさ、ちようど直樹は夏休みだし、いいじゃない？」

もちろん直樹は賛成した。おじいさんたちの住んでいる花浦がどんなところか、とても楽しみだし、新幹線にのるのもいい。ただ、ゆう子のおもりをしなくちゃならないことを考えると、やれやれだった。その気持ちを見ぬいたように、おかあさんは、

「ゆう子をたのむわよ。」

と、直樹に念をおした。

「おじいさんも、おばあさんも、もうお年ですからね、わかった？」

「わかったよつ、さあ、おりようよ。」

グレーのスツケースをさげて出口へ出ると、おかあさんは白のスツケースをさげ、ゆう子の手をひいてあとにつづいた。汽車は花浦のプラットホームにすべりこんでいった。

おじいさんの家は、花浦の駅から、車で二十分ばかりはいったところにあつた。むすめと孫がいっぺんにやってきたので、むかえにきたおじいさんは、車の中でも目を細めつばなしたつた。

「それで、あんた、いつ九州へたつんじや。ゆつくりしてからでいいのじやろう。」

「いいえ、とんでもない。今夜の夜行でたたせてもらいます。もうしわけないけど、直樹とゆう子、おねがいます。」

「そりや、いそがしいんじやな。」

おじいさんも、おどろいたようだった。まったく、いくらおじいさんの家だからといって、子どもをあずけるのに、一晩もいっしょにいないで、さっさと出発する。そういう人もあんまりないだろう。

「それで、九州きゅうしゅうには何日ぐらゐおるんじや。」

「そうねえ、四日よっかか……五日いつか、もしかしたらもうすこし長いかな、早いかな。」

おかあさんは首くびをかしげた。

「なにしろね、取材しゆさいつて仕事しごとでしょ。予定よていがたたないんです、ほんののとこ……。でも、なるべく早くかえ帰ります。」

「そうじゃなあ、直樹なげきはまあいいが、ゆう子こちゃんがどうかな。なんといつてもまだ二つだからな。おかあさん、おかあさんいうやろ。」

「ゆう子こ、二ちゆだもん。」

ゆう子こがかわりにへんじをした。

「はっはっは、そうかそうか、これから三つになるんだったな、えらい、えらい。」

おじいさんが感心かんしんした。するとゆう子こは、もつとかしこいところをみせるつもりでもないだろうが、とんでもないことをいった。

「おじいちゃん、おじいちゃんのかんかんには、どうして毛がないんでしょう。」

「いやあ、こりやまいったのう、こりやまいった。」

みんな大わらいになった。きよんととしていたゆう子こは、じぶんがわられたと思ったのか、ベそ



をかきそうになつて、

「わらつちやだめ、わらつちやだめ。」

と、なみだをためて抗議した。おとなは大わらいしそうになつて口をおさえ、

「はい、わらいません、わらいません。」

と、あわててへんじをする。大にぎやかだつた。気がつくと車はいつのまにか繁華街をぬけ、住宅地をぬけ、山の手へさしかかつていた。花浦にはむかし、殿さまが住んでいたのだそうだ。山城と、居城と二つあつて、山城のほうは早くとりこわされ、居城は、そつくり東京へはこんだとかで、そのあとが庭園になつている。遊ぶところはたくさんあるから、直樹もゆう子も、たいくつすることなんぞありやあせんよと、おじいさんは保証した。

「しかし、一晩もとまらんで今夜たついうたら、かあさんががっかりするぞ。」

おじいさんがいったとおり、家につくとおばあさんは気がぬけたように、

「やれまあ、やれまあ、いそがしいことじゃ。」

と、そればかりくりかえした。

「帰りにまたよりますから、そのときは一晩ぐらい、とまります。」

おかあさんはけろつとしている。

「まあまあ、それではともかく、お茶を入れて。あんたまあ、こえたな。」

それからながながと、おとなの話がはじまった。おとなの話はほんとにいやだ。なんでもおもしろいのかわからない話を、さもおもしろそうに、けらけらわらったり、そうかと思うと、ひそひそ声になつたりして、いつまでも、いつまでもつづく。そのあいだには、それ、ゆう子がわらつたとか、ゆう子がないとかで大さわぎだ。ぼくのことなんか、いたっていないくたつていいみたいだ。直樹はそう思つてむくれていた。ようし、あしたつからはゆう子が、ぼくのこしにくつついてくるにきまつていゝ。とすると、きよう、それも、あと数時間の自由だぞ、直樹はそつとおじいさんの家をぬけ出した。